



パレスチナの田舎の風景。



街中で商売するアラブ人。



ヨルダン川西岸地区内にも、イスラエル兵の姿が見られる。イスラエルに抵抗する人びとを拘禁したり、有事の際の道路封鎖が繰り返される。



セイタ村のオリーブ畑。セイタは、オリーブの意。

特集 【現地レポート】

オリーブオイルの里、パレスチナを訪ねて

若井俊宏／わかい・としひろ
（株）オルター・トレード・ジャパン事業部

2014年11月、オリーブオイルの産地であるパレスチナを初めて訪問した。日本の報道では、パレスチナについて得られる情報は極めて少ない。「危険で物騒な」イメージを持つ人も多いだろう。私自身、（株）オルター・トレード・ジャパン（以下ATJ）に入社する前はそうだった。しかし、実際に訪れてみると、のどかな村でオリーブ栽培が営まれており、ごく普通の田舎の風景が広がっている。

街中では、いたるところに典型的アラブ商人がいる。買いものをしようとすると、最初は高値を吹っかけてくるが、値切るとあっさりとマケてくれる。買わないと必死に食いが下ってくる。そんな日常の光景は、日本で考えていた「パレスチナ」のイメージと、実際の人びとの暮らしとの間に、大きな違いがあることを強く感じさせた。

一方で、この地が現在大きな問題を抱えていることは明らかであり、そのために理不尽な暮らしを強いられている人が大勢いる。なぜこのような事態が続いているのか。国際的にパレスチナが無関心に晒されてしまわないように、もっと多くの人たちにパレスチナへの関心を持ってほしいと願う。

三本の矢ではなく一本の筈

富山 普／とみやま・ひろし
東京朝市・アースティマーケット事務局長

先日、映画『カンター！ティモール』を観させていただきました。美味しいお料理とティモールのコーヒー、同じくまだ厳しい状況にあるという西バブアのチヨコレートを頂きながら、舌と頭と心で理解できる素晴らしいイベントでした。そして力強い映画に心を鷲掴みにされました。人の意志の力に心揺さぶられ、その強烈な事柄に衝撃を受けました。映画製作前から現地を知る報道写真家がこの映画の監修の南風島渉さんの上映後のトークも併せ、非常に多くを学ぶきっかけになりました。内容には（まだご覧になって無い方がいらっしやれば観ていただきたいので）ごく簡単に触れると、この映画は約26年間で20万人の犠牲を出しながらも、2002年についてに独立を果たした東ティモールの人びとの記録です。東ティモールの人びとが求めたものは、自分たちの土地で平和に生きる権利、そして民族としての自決権。ただそのために闘い続けました。それが99年の住民投票につながるのです。映画を観ながら前日の沖縄の知事選の結

果を思い起こし、我々は犠牲や問題が大きく身近でない、何かを変えよう力を持っていないのだろうかと思念がわいてきたのです。しかし、映画を観ていくなかで、僕らの疑念を晴らすような場面が出てきました。中心の登場人物の音楽家アレックスと友人との会話の中で出てくる「ホウキだって東になっていくからほけるんだ」という言葉です。一本一本は細くともしなやかで、寄り沿える民衆の力。行ってきた者たちの中からしか生まれない本物の言葉だと感じました。犠牲は無くとも、寄り沿い、話し合える社会が一番重要なのかもしれません。自分が失ってはいけないものは、選ばなかった社会への批判でも、失いかけて気づく権利でもなく、ホウキになれる仲間づくりかもしれません。毛利元就が子どもに団結を説いたとされる「三本の矢」という言葉が安倍政権の経済政策にすげ変わってしまいましたが、市民ならでは、矢より筈の社会づくりをより身近に進めたいと思います。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。



表紙のことば

東ティモールのティリ市内で、ティモール伝統の織物「タイス」と一見色合いもデザインも違う布を売る店に出会った。「南東の島々」という意味のヌサトゥンガラ諸島のものだという。バリ島の隣にあるロンボクからティモールまで約1,000もの島々が連なり、多様な文化をもつ民族が暮らしている。かつて先人たちは文字の代わりに織物の文様に歴史や物語を綴った。そして人とともに織物も海を渡り、近隣の文化と混じり合ったという。それを思い再度この織物を見ると、ティモールのタイスに共通する文様がいたるところに刻まれていることに気が付いた。数千年に及ぶ時間の中で人びとの物語は文様を通して語り継がれた。そこには、たかだか数百年前に征服者が武力によって引いた国境などはまったく存在しない。(大橋成子)

CONTENTS ■ HALINA 27 2015.02.01

- 02 Relay Essay ポコポコ 27 三本の矢ではなく一本の筈◎富山 普
- 03 【特集】現地レポート オリーブオイルの里、パレスチナを訪ねて◎若井俊宏
- 08 [今、考えたいこと] 「私たちのいのち」へのまなざし◎秋山眞兄
- 10 [Column] Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記◎ パブアのクリスマス!◎津留歴子 マニラ・ジープニー通勤◎ 架け橋はむずかしい◎小川二美子 ロクサエの歌が聴こえる◎ SASIN BA RAI◎野川未央 美味しいマンガ◎ 『夏子の酒』◎安藤文将
- 12 わたしの友産友消じまん◎ 「ほ穂」の巻◎関 敏之
- 13 APLA食堂◎ La Granda Familio Nakazakichoのグラノーラ◎大久保ふみ、廣瀬康代
- 14 [Voice from APLA partners] 【北部ルソンより】フィリピンのみかん村より日本にやってきました。
- 15 事務局だより



壁に囲まれているヨルダン川西岸地区。



コンクリートの人工物が、意志を持った生き物のように伸びている。



イスラエルの入植地。

ヨルダン川西岸地区を移動する道中で少し遠くを見渡すと、小高い丘の上に近代的な建物が理路整然と並んでいる光景に出くわす。イスラエルによる入植地である。大きいところは、フェンスや壁で囲んである。「パレスチナ人から身を守るため」であるらしいが、裏を返せば「攻撃される理由があることをわかかっていて造られた街である」ことを認めているに等しい。この入植地は、パレスチナの美しい景観を著しく損なっているのみならず、パレスチナの村同士の交流を妨げ、入植者によるパレスチナ人への嫌がらせも後を絶た

ない。サルファイト郡の東に位置するアクラバ村も、1967年のイスラエルによる占領以前は、東はヨルダン川まで土地が広がっていた。元々人口5万人のこの村は、イスラエルの占領によって多くの人が村外へ移住し、現在は1万人程度になった。土地も、東側のほとんどは、イスラエルが実質的な権利を握っているC地区^(注)となってしまう。C地区では、住居の建設はおろか、畑を開墾することすら、イスラエルの許可が必要となる。その土地を自分たちのものと考えたイスラエル側は、当然許可など出さない。放っておけば、自分たちの土地がイスラエルに接収されてしまう……。このような事情か

ら、A T Jの現地パートナーであるU A W C (パレスチナ農業開発センター) は村の開墾プロジェクトを進め、土地を取り戻す取り組みを実施している。また、村の外には時折入植者がやってきて、家を破壊したり、オリーブの木を焼きはらったりしていく。これもつまり、郊外のパレスチナ人を村中へ囲い込み、その土地をイスラエルが実質的に押さえるための一つの戦略である。パレスチナ人とイスラエル入植者のイタチゴッコが続いている。

さらに、パレスチナ自治区では水の利用も制限されている。井戸を掘ることは全ての地区で許可が必要で、その許可もなかなか下りない。水道自体はイスラエルが管理しており、住民がパレスチナ自治政府に払った水道代は、パレスチナ自治政府がイスラエルに払う仕組みとなっている。入植地では、日本と同様に24時間年中無休で水道の利用ができるようであるが、パレスチナ住民に上水が供給されるのは、週に2〜3日程度。それ以外の時は、雨水を貯めて凌ぐ。パレスチナ人の使う建物の屋根には、ほぼ必ず黒い雨水タンクが備え付けられている。

イスラエルの政策と矛盾

ヨルダン川西岸地区にイスラエルが入植地を建設することは、ジュネーブ条約等の国際法で禁止されている行為である。また、分離

ガン細胞のように増える入植地と、パレスチナ住民への制限



いたるところにベドウィンの集落がある。



ナブルスの街。路上で柿を売っていた。

ヨルダン川西岸地区は、東側にヨルダン渓谷を臨み、オリーブの緑色と石灰岩の白色が広がる、わりと荒涼とした風景が続く。世界最古の街といわれるジェリコや、世界一低い場所として知られる死海もある丘陵地帯に作られたオリーブ畑は、手入れや収穫がしやすいように段々畑のような形に整えられており、古来よりオリーブ産地であったことを偲ぼせる。人の知恵や工夫が自然の景観を壊さずに共存するには、長い時間が必要であり、土地と人が積み重ねてきた年月が風景となって残る。これがパレスチナの魅力ではないだろうか。石で作られた地味な建物が立ち並ぶ村や、バラックのようなベドウィン(遊牧民)の集落が点

在するなかで、人びとの暮らしが営まれている。街中に入ると、行き交う露天商や人びとの喧騒のほか、ケバブの焼かれる香ばしい匂いやアラビア風コーヒーのカルダモンの香りが漂う。水タバコをゆったりと吸い込みながら余生を送る老人の眼前を、自転車代わりのロバに乗った若者が過ぎ去っていく。小さい頃に絵本を見てワクワクした「アラビアのくに」のような街並みの中で人びとが暮らしていた。

を見たのは、生まれて初めてだった。なかには樹齢数百年という大木もある。縄文杉には勝てないが、古さと本数で考えると圧倒される。訪問した11月は、すでに収穫期の後半であり、実は黒く熟しているものが多かった。こういう実は輸出には適さないもので、自家消費用のオリーブに回される。パレスチナでは、むしろ古めのオリーブや、る過ぎない味の濃いオリーブが好まれる。親の敵のように料理に用い、「どうだ」と言わんばかりに、我々日本人にどや顔を向ける。収穫したオリーブを搾る搾油所に払う代金もオリーブオイルというから、筋金入りのオリーブオイル好きな人びとなのである。オリーブがいかにか生活に密着した存在であるか、これ以上の説明は必要ない。搾りたてのオリーブは、青くさい香りが立ち、苦みと渋みと辛みが利いた大人の味。その場でしか味わえない貴重なものである。

壁が生活を分断する

さて、そんなヨルダン川西岸地区は今どのような状態なのか。まず、西側は壁に囲まれている。イスラエルが「パレスチナのテロ

リストから自国の安全を守る」という名目で2002年より建設を始め、場所によってはグリーンライン(テベジヨラム参照)を越えてパレスチナ自治区側に食い込んで作られている。土地を無理やり壁で分断することで、「グリーンラインのパレスチナ側部分を、強制的かつ実質的にイスラエル側の土地にする」という明確な意図が感じられる。よく日本の小学生が校庭で遊ぶ時に、線を引いて自分たちの陣地を主張したりするが、同様の事を国家単位でやっている。子どもの幼稚さと大人の政治の世界とが奇妙に同居したような、誠に異様な光景であった。

オリーブ産地であるアルザイエ村は、本来は西側のグリーンラインまで土地が広がっているが、入植地と分離壁の建設によって約4分の1の土地は、壁の「向こう側」となってしまう。訪問した時点では、村人が「向こう側」の土地へ入る許可がイスラエル側から降りておらず、オリーブの収穫がまだできていなかった。ほぼ全員がオリーブ栽培に携わるこの村において、それがいかに大きな影響であるかは、想像に難くない。



C地区のオリーブ畑。土地を畑に変えることで、イスラエルによる接収を防ぐ。柵は、入植者対策。

壁の建設についても、グリーンラインを超えた分については違法であるとして、2004年7月に国際司法裁判所は認めている。これほどに周囲が注意・勧告を続けているにも関わらず、イスラエルは一顧だにせず、強硬に突っぱねている。これは、米国の強大な後ろ盾があることが大きい。実際に米国は、イスラエルの政策を非難する国連安保理決議について、1972年9月以来計40回以上拒否権を行使してきている。つまりイスラエルは、最終的には非難されないとわかってやっている節がある。

イスラエルでなくなってしまうという恐怖の一方で、それを続けることで世の中がパレスチナ支援に傾く可能性にも怯えつつ、国家基盤を守るためには武装強化と自分たちの正当化以外に方法論が見いだせず、それを全面支援してくる国家は米国以外にない……という四面楚歌な状況下で、必死にフランスを取っているように見える。危険を察知して針を立てているハリネズミのようなものである。

イスラエルでなくなってしまうという恐怖の一方で、それを続けることで世の中がパレスチナ支援に傾く可能性にも怯えつつ、国家基盤を守るためには武装強化と自分たちの正当化以外に方法論が見いだせず、それを全面支援してくる国家は米国以外にない……という四面楚歌な状況下で、必死にフランスを取っているように見える。危険を察知して針を立てているハリネズミのようなものである。



黒タンクのあるパレスチナ人の建物。



ラマラのホテルに、スウェーデンの国旗。EUで初めて、パレスチナを国家承認した。こういう動きが、イスラエルにとっては非常に怖い。

「あなたは盗んではならない」、「あなたは隣人の家を貪ってはならない」という戒めが記されている。となると、封鎖されたガザ地区に国を挙げて侵攻して2000人以上の死者を出したことも、パレスチナ自治区の土地をイスラエルに併合しようとしていることも、パレスチナ自治区の家屋を破壊してその土地を入植地にすることも、全て戒律違反となるのではないか。こうした国家の在り方と宗教の在り方の間の矛盾を、感じざるを得ない。

パレスチナ交易の意義

特に1967年のイスラエルによる占領以降、経済発展を妨げる目的で、パレスチナの農業は政策的に鑑みられてこなかったという。それに対し現地パートナーであるPARC（パレスチナ農業復興委員会）やUAWCは、自立したパレスチナ農業の確立と土地を守るための取り組みを両輪として、農村支援や



UAWCが11月にオープンさせた、地場産物を守る店「バス・バラディ（全てパレスチナ産）」。

土地の開墾、生産者の協同組合化などを推進してきた。国際的に通用する品質の農産物を作れるようになることでマーケットを広げ、農業による確固たる経済基盤作りに寄与してきている。PARCもUAWCも1980年代に設立されており、勤めているスタッフはイスラエル建国が宣言された1948年どころか、1967年以降に生まれた人も多いが、「壁がグリーンラインに沿っているのであればまだ理解できるが、それを越えて作るのには許せない」と、厳しく批判する。占領に対する抵抗運動の結果、刑務所暮らしを経験したスタッフもいる。パレスチナで暮らしている人の多くは、全パレスチナの解放というよりは、占領による抑圧のない、あるべき普通の暮らしができるこ

とを求めているように感じられた。しかし、残念ながら「パレスチナに暮らす普通の人びと」に目を向ける機会や、パレスチナの面白さ・魅力について語る資料は少ないのが現状である。「パレスチナは危ないところ」という一辺倒な

先入観を取り払うだけの情報がなく、心理的にも遠い状況ができてしまっている。だからこそ、パレスチナとの交易を通して「ニュースでは得られない情報」を伝えていくことは重要である。特に、パレスチナの食文化の根底をなすオ

リーブオイルは、その筆頭と言える。百聞は一食に如かず、ぜひ一度口にしてみて頂きたい。そして、それを通じてパレスチナを少しでも身近に感じることができれば、「我々と同じような普通の暮らしを営むオリーブ農家がいること」

や、「そういつた彼らの暮らしが脅かされている」という単純な事実が、素直に見えてくるはずだ。

〔注〕現在、パレスチナの自治権限は、A地区/B地区/C地区に分かれている。A地区ではパレスチナ自治政府に行政権・警察権の両方が認められ、B地区では警察権はイスラエルとの合同となっており、C地区は全権限がイスラエル側にありとされる。

パレスチナは、「ペリシテ人の土地」という意味で、もともと地中海東岸の一角を指す呼称であった。紀元135年にこの地を支配したローマ帝国が、古代イスラエル王国に端を発するユダヤ教を制圧するために、ユダヤ教と関係のない名称としてつけたといわれている。ローマ帝国の支配に伴い、多くのユダヤ教信者は離散（ディアスポラ）を余儀なくされた。



現在のパレスチナ自治区 ※この領土のうち、A地区(17.2%)、B地区(23.8%)、C地区(59%)に分断されている。(2000年時点) 1947年の分割案ではアラブ国家だったが、第一次中東戦争後、イスラエルの支配下に。イスラエル

その後、パレスチナの地はエジプトやオスマン帝国の支配下となり、近世を迎える。19世紀以降、世界各地でユダヤ人への迫害が激化していくなか、「聖書に記された、神がユダヤ人に与えた土地」としてのパレスチナへ、ユダヤ人の国を作る」というシオニズム運動が広がり、パレスチナへのユダヤ人入植が進んでいった。この運動のスローガンは「土地なき民に、民なき土地を」というものであっ

パレスチナとイスラエル

だが、パレスチナは「民なき土地」ではなかった。元々住んでいた住民（パレスチナ）は当然この運動に反対し、パレスチナ人とユダヤ人（シオニスト）の対立が始まった。1922年、第一次世界大戦勝利の見返りとして、英国がパレスチナの統治を開始した。しかし、もはや内戦状態にも等しいパレスチナ人とシオニストの対立は容易に解決できるものではなく、統治領内の混乱を収拾できないとみた英国は、この問題の一切を国連に付託する。これを受けた国連が解決案の模索を始め、47年11月29日、パレスチナ全土の57%弱をユダヤ

国家、43%弱をアラブ国家に分割する、というパレスチナ分割案が採択された。48年5月14日の英国委任統治終了と同時に、シオニストはイスラエルの建国を宣言し、それに反発する周辺のアラブ諸国が侵攻を始めた（第一次中東戦争）。この戦争はイスラエルの勝利に終わり、国連の分割決議よりさらに多いパレスチナ全土の77%強がイスラエルの支配下となった。現在国際的に境界線と認識されているグリーンラインは、分割案によるものでなく、この第一次中東戦争後のものである。ヨルダン川西岸地区とガザ地

区はこの時に大きく分け隔てられ、両者が、現在「パレスチナ自治区」と呼ばれる地域となり、多くの難民が発生した。67年6月の第三次中東戦争に勝利を収めたイスラエルは、現在のパレスチナ自治区を含めた周辺地域を軍事占領し、東エルサレムを併合して周辺への入植地の建設を開始した。その後、パレスチナ人に部分的な自治が認められた93年のオスロ合意まで、パレスチナはイスラエルの占領下にあった。67年11月の国連安保理決議242号は、領土獲得を認めず軍事占領した地域からイスラエル軍が撤退することを求めているが、イスラエルは、占領ではなく「管理」であるという主張をし、現在にいたるまで実質的な占領行為を継続してきている。

〔注〕紀元前13世紀頃にこの地に入ってきた海洋民族。ユダヤ人の中には「ユダヤ国家を作るべきではない」と考える人も多い。

東

日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所

事故から4年が経とうとしている。大震災と原発事故は私たちの、さらにいえば人類のこれまでの歩みが根底的に問われた事態なのではないかと私は感じてきた。2011年4月下旬から被災地・被曝地に通いはじめたが、まず思わされたことは「言葉に力があるのか」ということであった。作曲家・武満徹が「音、沈黙と測りあえるほどに」と述べたことを思い浮かべつつ、「沈黙と測りあえるほどの言葉とは何か」ということが頭を駆けめぐった。そことは今も同じで、3・11以後、何を語るのか、何が語れるのかとの戸惑いのなかに居続けている。「今、考えたいこと」を書いてほしいと依頼されたが、その戸惑いを抱え、不確かな感触を感じつつ稿を起すしかなない。

傲慢と貪欲が支配する社会にあつて

原発事故は、人間は自分たちだけが獲得した理智を用いて、本能・自然、さらには地球という領域を超えてきたが、それ以上超え

にできないと思いつつ、ほうれん草を根こそぎ取ったのが、最初の除染作業だった。「バナナ募金」でバランゴンバナナを送っている幼稚園のお母さんたちが「原発事故が起きたとき、すぐに子どもを遠くへと逃がすことができなかったし、今も子どもたちと放射線量の高い地域で暮らし、子どもにそれは触ってはいけない、そこに入っていないと毎日言い続けています。そのために、子どもたちは身体も心も縮こまらせて毎日を暮らしているのです。それでも、自分のいのちを守るために母親が必至に生きてくれたのだと、子どもたちに理解してもら

える時が来ることを願って毎日生きています。それが私たちの苦悩を癒してくれる希望なのです」と語ってくれた。四半世紀前の事にはなるが、砂糖危機で地主に切り捨てられ飢餓に襲われた砂糖農園で、放棄された砂糖キビ畑の一部を水田にして、どうにかして自分たちの手で食料を作ろうと闘っている貧しい集落を訪ねたとき、その村の若いリーダーが「毎夜、寂しい思いや苦しい思いを持って寝なくてはならな

今、考えたいこと

今、考えたいこと

「私たちのいのち」へのまなざし

秋山真兄 / あきやま・なおえ
APLA共同代表

てはならないという限界を見極めることなく、際限なく肥大化してきた高慢さ、貪欲さを露にした。

あるいは、理智をすでに捨て去っていたことを露にした、といつてもよい。事故後、その責任を担うべき国・行政・企業・専門家の在り方は、まさしく理智などが雲散霧消してしまい、高慢と貪欲だけ

い村人がいないようにしたいと思つています」と訥々と話してくれただことも思い出す。これらには「私のいのち」でもなく、「彼女のいのち」でもなく、「私たちのいのち」がある。もちろん、前述したように原発事故への対応をはじめ、様々な問題について抗うこと、すなわちそれらの責任者・推進者や組織を第三者として、それに真つ向から対峙することが必要である。しかし、そのためにこそ「私たちのいのち」ということを大切にしなければなら

まい。APLAの活動は、アジアの農民たちとの連帯、農民どうしのつながり、農民とその生産物を受け取る者との相互協力を紡ぎだし、それによって小農民とその農村が自立へと歩み出し、民衆交易という社会的・経済(経世済民)的な仕組みへと展開していくことをめざしている。そのためには、農業に関連する世界的、国家的な動きにも注目しなくてはならない。しかし、それに呼応した具体的実践は「私たち」の領域から考え、進めてい

かなくてはならない。例えば、「地産地消」という課題・運動は私

が充填されているとしか思えない。具体的な対応策とその実施には、技術的にも、経済的にも、また法的にもいろいろな困難が伴うことはいままでもない。なにしろ経験したことがない事態であり、しかも予測されていたにもかかわらず一切無視してきたのだから当然である。そうだからこそ、責任ある者がどのような在り方をするかが鍵となる。しかし、その在り方があまりにお粗末、というより惨憺たるものとしかいいようがない。このことは原発事故に止まらないことは明らかである。政府・与党が憲法解釈の変更と、集団的自衛権の行使の容認、特定秘密保護法の施行、普天間基地移設(辺野古新基地建設)強行、原発再稼働と輸出、生活保護費の切り下げや受給者の切り捨て、儲かる教育・統制教育の推進など、次々に繰り出し成立させ進めていく政策は言わずもなである。

このような事態のなかで、私たちは何をしなければならぬのか。選挙権を行使し、デモや訴訟によって異議を申し立て、政府・行政のなすことを監視し、闘いの現場に生きる人びとと連帯すること。

たちとつて重要な内容を持つている。ここに込められた思いを、都会に住むしかない人たちの思いをも踏まえて、新たに「友産友消」という言葉が生み出されていることを知らされた。ここには「私たちのいのち」へのまなざしがあると私は感じる。

「私たちのいのち」へのまなざしを

ある国会議員が、息子はそれなりに有名で収入があるのに親が生活保護を受けているという稀な事例を首級として、生活保護受給者全体への誹謗と受給額切り下げを叫び、それに驚くほどの多くの国会議員が付和雷同した事態。選挙情勢が厳しいとなると、それまで強行していた辺野古での工事作業を一時撤回した事態。かなり訓練された者がしなくてはならない極めて慎重を要する除染を、にか仕立ての作業員が被曝すること

を当然として除染作業にあたらせ、避難している人びとの望郷の思いを利用してできるだけ早く帰郷させようとする事態。集団的自衛権発動によって起きうる事態。そこには、「私のいのち」だけしかなく、

それをそれぞれのできる範囲で、自分が手にしている力に応じて行動していくことが求められている。そのうえで、あるいは、それができないとしても、前述した理智を捨て去った事態を、自分自身の問題として向かい合うことが求められているのではないか。それは軟弱なことではないかと思われるかもしれないし、当然のことであろうとも思われるだろうが、「いのちへのまなざし」を回復することではないか。そして、「私」「彼女」「彼女のいのち」ということより、「私たちのいのち」へのまなざしの回復である。

「私たち」の領域から考える

APLAは原発事故後、福島県二本松市の有機農業グループと交流を重ねてきているが、その代表の大内信一さんは次のように語ってくれた。「原発が爆発したとき、農業を続けられるのだろうかと思いつつ畑に行ったら、ほうれん草が『私たちは、人が外には出るな』という時に葉っぱを広げて、降ってくる放射能を受け止め、土を守ったよ』と言っていた。私はほうれん草が愛おしく、その思いを無

「彼・彼女のいのち」も敵でしかないのである。そこに「私たちのいのち」など全く存在していない。「私たち」という言葉さえ持つていないに違いない。

この「私たちのいのち」へのまなざしの喪失。いや、捨て去ってきた結果が、3・11の事態であり、この4年近く、これでもか、これでもかと見せつけられてきた事態ではないだろうか。これほどまでに人間性が疲弊し、幼稚化し、しかも暴力的になっていく時代は、これまでにあつただろうか。アジア太平洋戦争直前と同じ時代模様だとよく言われているが、それ以下の最低の事態ではないのか。

そのような「今」に私たちは立たされている。その「今」を変え、それとは違う道を歩むしかない。どこで、どのように。それは「私たちのいのち」を最初に感じ知った場、家族、仲間、同志、仕事、大地、ネグロス、被災・被曝地……で、もう一度「私たちのいのち」へのまなざしを回復し深化させていくこと、今自分が在る場で「私たちのいのち」とは何なのかを思いめぐらすことから始めるしかあるまい。■



03

コロサエの歌が聴こえる 03

Ego Lemosの世界

野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

SASIN BA RAI

今回紹介する歌のタイトルは『SASIN BA RAI—大地の証人』。姿を変えていくティモールの大地を見つめつづける存在として、エゴが自分自身のことを表現したのだろうか。

右に訳文を載せたパートの前後で、彼はこう歌う。「子どものころは古い森がたくさんあった。小川が流れ、大地には緑があふれていた。大人になる頃にはその森が消えてしまった。小川の水は枯れ、大地は乾ききっている」「これから来る時代のことは、わからない。人はさらに罪を重ね、この大地で生きていくことは難しくなるかもしれない」

重いメッセージだが、そういう未来を子どもたちの世代に手渡さないように、エゴは地域の住民と一緒に森を生き返らせるための活動を続けてきた。2013年からは、エルメラ県のコーヒー産地でもAPLAと協働して、樹を植え、水源を守る活動に取り組んでいる。「大地の証人」として、ティモール島の、そして地球の行く末を見守る。ただ見守るだけではなく、未来をつくっていく。



エゴの指導の元、皆で樹を植える。

Tamba ne'e kuidadu ba ai laran
Kuidadu sira hanesan lta an
Keta tesi sunu ai laran
Hanesan oho lta nia an
Ai laran lakon halo rai manas
Be'e maran hotu halo rai krekas

だからね、森を大切にしなければ
自分たち自身を大切にしようにね
簡単に木を切って、燃やしてはダメだよ
それは自分たちを殺めることと一緒になんだ
森がなくなったら、水は干上がり、
大地はやせてしまうから (訳:野川未央)

01

カカオ キタ kakao kita

カカオ民衆交易奮闘記

9

津留歴史 / つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員メナセさんの子どもたち。
クリスマス小屋の前で「ハイ、チーズ！」。

パプアのクリスマス！
大多数の先住民族がキリスト教徒であるパプアでは、12月に入ると町でも村でもクリスマス・ムードに溢れる。まずそこで目を引くのは、人びとが創意工夫を凝らして家の前につくる、キリスト生誕をイメージした小屋である。家族総出でこの小屋づくりに全力投球するらしい。小屋から大音量でクリスマス・ソングを流しつづける家もある。夜になると小屋に飾られた色とりどりの電光ランプのまたたきが美しい。

カカオの出荷団体「カカオ・キタ」スタッフのメナセさんはイブの前日、自らチャーターした車で村に住む家族全員(妻、娘4人、息子1人)をセントラの町に連れてきた。子どもたちには洋服と靴を買ってあげたためだ。人びとは新品の服と靴で教会のミサに参加するのが喜びなのだ。クリスマスが近づくと、こうしたメナセさんのような家族が町のモールや市場に溢れる。道路は遠方の村人がチャーターした車で大混雑。イブ前日のいちはば、食材や衣料品を買い求める人で大賑わい。ここは熱帯なので汗だくだ。メナセさんはパプアのクリスマス熱気を次のように語った。「村に宣教師が初めて来たのは、ちょうど100年前だった。それまで人びとは裸の生活、読み書きもできない。暗闇」の中にいた。それがキリストの教えでわたしたちは衣服を着て、読み書きを習い、外の世界とつながるようになった。本当に感謝しているんだ。だからキリストの誕生日を祝うことにどんなにお金を使っても惜しいとは思わない。パプア人がクリスマスに思い切り散財するのはそういう訳さ。なるほどと頷きつつも、パプアの人びとも消費を煽る商業化されたクリスマスに巻き込まれているのか、とため息が出る。こうして迎えたメナセさんの村のクリスマス。大人も子どもも真新しい服を着て教会のミサに参列。蝋燭が灯る教会の中、村人全員で歌いあげる讃美歌の美しさ……やっとなかなかクリスマスがやってきた。メリ・クリスマス！

04

美味しいマンガ

03

『夏子の酒』
尾瀬あきら(著)
講談社漫画文庫安藤丈将 / あんどう・たけまさ
武蔵大学教員

今回は、『夏子の酒』を取り上げます。この作品では、東京でコピーライターの仕事をしてきた女性が、実家の酒蔵に戻り、酒造りに取り組む。『夏子の酒』は、広く読者を獲得してテレビドラマにもなった有機農業マンガの古典とも言える作品です。

この作品の舞台は、新潟県とされる農村ですが、その米と酒造りの描写から、1988〜91年の連載時の村の現実を垣間見ることができま。ヘリコプターでの農業の空中散歩が地域の子どもたちに健康被害を引き起こすシーンは、健康や環境よりも経済効率を優先させる村の姿を示しています。大企業が日本酒市場を支配する一方、中小の造り酒屋の経営が脅かされる様子も出てきます。酒造の工業化が支配的な潮流になるなか、丁寧な酒造りをしていく酒蔵も、三倍醸造酒を製造する大手の販売力に圧倒されてしまっています。農協

有機農業の「たすき渡し」

今回は、『夏子の酒』を取り上げる指示に従って米を作る農家や企業に言われるがまま酒を売る小売店主からは、自らの仕事への誇りを見て取ることができません。

作品全体を貫いているテーマの一つは、有機農業の継承です。主人公の夏子は、若くして亡くなった兄の意志を継いで、「龍錦」という幻の米を有機栽培し、その米を使って純米吟醸酒を造ることに挑戦しました。職人の兄の志を継ぐというのは簡単なことではなく、時に気負いすぎて自らを苦しめます。「龍錦」を育てるのに昔のやり方にこだわって、荒れた土地を一本の鋤で耕そうとして、体調を崩すこともありましたが、しかし主人公の情熱は、周囲の心を動かす。支持者を次々と増やしていきます。「日本一の酒」を造るという兄の願いを引き受けながら、その呪縛から自らを解放して、「自分らしい酒」に行き着くのです。

原作の刊行から20年以上過ぎ、有機農業の「たすき渡し」は、急を要する課題になっています。高度成長期以降に日本の有機農業を切り開いてきた世代が高齢になり、次世代へのバトンタッチが進んでいるからです。そんな今、有機農業の古典である『夏子の酒』を読み直すのにふさわしい時と言えるでしょう。

02

マニラ・ジープニー通勤 3

小川二美子 / おがわ・ふみこ
マニラ在住、会社員

架け橋はむずかしい

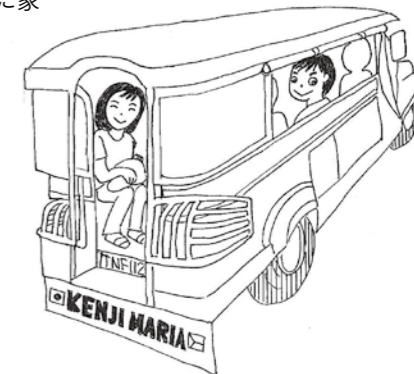
比較的新しいジープニーの乗降口には泥除けがあり、たいていGODやJESUSなど神様の名前が書いてありますが、時々、日本人の名前や日の丸を見かけます。これはジープニーの持ち主の親族が日本人男性と結婚していることを意味します。

あるフィリピン女性は、日本人と結婚後、日本から家族に仕送りをしていました。クリーニング店で働き、給料のほとんどを家族に送金していました。夫から「いつまでも仕送りに頼って生活するのはおかしいんじゃないの」と言われることもあり、恥ずかしい気持ちでいっぱいでした。

彼女はその後妊娠し、仕事ができなくなり、夫に相談して思い切ってジープニーを買うことにしました。フィリピンにいる兄が昼間運転し、夜間に人に貸せば、一日1,000〜1,500ペソ(約2,500〜3,750円)は実家の収入になる計算でした。ジープニーを購入後、彼女は実家を訪れ、ピカピカの新しい泥除けに夫婦の名前が書かれているのを見て、この車が日本とフィリピンの架け橋になったようで誇らしい気持ちになりました。

運行許可証も取れ、いよいよジープニーは走り始めました。すべて順調で仕送りの必要もなくなり、彼女は無事に子どもを出産。夫婦は喜びあいました。

しかし2年くらい経った頃、実家から彼女のもとにお金を無心する電話が……。メンテナンス代や年一度の登録料が払えないというのです。しかも兄の家族の出費がかさみ、兄が両親に払うべきお金も滞り、日本にいる娘にまた頼ってきたのです。せっかく買ったジープニーは飾り物になる始末。拳句のはてに家族は車を担保にお金を借りるようになり、ジープニーはどうとう人手に渡ってしまいました。日本とフィリピンの架け橋は、なかなかむずかしいです。



APLA 食堂

Kitchen APLA

07

今日の食材 La Granda Familia Nakazakichoのグラノーラ

レポーター 大久保ふみ / おおほ・ふみ
APLA事務局
廣瀬康代 / ひろせ・やすよ
APLA理事

とっても簡単 グラノーラ活用術



▲ソルト&ペッパーグラノーラ+クリームチーズ
▼バナナグラノーラ+卵(左)と
ソルト&ペッパーグラノーラ+ポタージュスープ(右)

APLA食堂では、ATJ/APLAで扱っている食材を利用したレシピをご紹介します。手の込んだ料理も素敵ですが、もっと手軽に使っていただけるように、「誰でも簡単に作れる」レシピをお届けします。



La Granda Familia Nakazakichoのソルト&ペッパーグラノーラ(左)とバナナグラノーラ(右)。ソルト&ペッパーは、APLAオリジナルでパレスチナのオリーブオイルを使用したものを作ってもらいました。APLA SHOPでもご購入いただけます。

その1 ソルト&ペッパーグラノーラ + クリームチーズ

ちょっとひと手間でおつまみやオードブルにも使える一品に。

【作り方】

1. グラノーラ40gとクリームチーズ40gをボールに入れて混ぜ、ラップに包み棒状にする(ラップに包まず、器にそのままでもOK)。
2. 冷蔵庫で30分以上おく。好みの大きさに切りトマトやセロリ、クラッカーなどに乗せる。

その2 ソルト&ペッパーグラノーラ + ポタージュスープ

お好みのスープにグラノーラを好きな量入れるだけ。これだけでボリュームアップするので忙しい朝におすすめ。

今回はしらたかノラの会のかほちャスープとにんじんスープを使いました。



その3 バナナグラノーラ+卵

ゴリーバ(モロッコ風クッキー)のレシピを参考にして、携帯にも便利なおやつになりました。

【作り方】(8~10個分)

1. フードプロセッサーでグラノーラ200gと卵1個を混ぜ(あまり細かくしすぎない)、直径3~4cmの大きさに丸くまとめる。
2. クッキングシートを敷いたフライパンに弱火で8分、裏返して5分ふたをして焼く(オープンの場合は180℃で10分)焼きたては柔らかいですが、冷めたら固まります。

撮影協力: 齊藤和子

今回の雑学

グラノーラとは、オーツ麦、麦、玄米、とうもろこしなどを蜂蜜や黒砂糖、植物油を混ぜてオープンで焼き、ドライフルーツ、ココナッツ、ナッツなどをミックスして作った食べ物で、シリアル的一种です。グラノーラという言葉は米俗語の用法でもあって、「(人が)健康志向の、環境を意識した」「ヒッピー的カルチャーに逆戻りしたような(人)」という意味もあるそうです。これはグラノーラの持つ健全で自然主義的なイメージが1960年代のヒッピー文化やカウンターカルチャーなどと結び付けられているためです。

今回3種類を試しましたが、私のお気に入りにはソルト&ペッパーとクリームチーズの組み合わせです。塩味のきいたグラノーラはなかなか珍しく、チーズとよく合ってとてもおいしい! カタログには載っていませんがAPLA SHOPで販売をしているので、気になる方は事務局までご連絡ください!

【参考文献】 La Granda Familia Nakazakichoパンフレットより

自慢する人 関敏之 / せき・としゆき
魚屋4代目

日本酒が好きだ。いつの頃からか、あるひとつの疑問が浮かんできいてきた。

それは、原料となる米のこと。ほとんどが酒造好適米という酒米を醸したものだ。何よりも誰がどんな田んぼでどのように作ったものなのか。この疑問こそが「ほ穂」の原点になったのかもしれない。

アースデイマーケット仲間江戸時代から続く米農家「みやもと山」斎藤さんの米作りへの想いにこころ動かされるものがあり、思い切ってお願ひしてみた。「斎藤さんの米で日本酒を作らせてもらえませんか?」すると「食べるための米を作っているけれど、5俵位なら何とかするよ」との答え。

後日、千葉県匝瑳市のみやもと山さんに伺った。そこは、美しい里山の谷津田だった。江戸時代からさほど変わっていないかもしれない田の畦に腰掛けると、先人も眺めていたであろう青空にぼっかり浮かんだ雲が印象的だった。

わたしの友産友消じまん 03

「ほ穂」の巻

風渡る里山の谷津田。



作られた米の悠久の味わいで、本当に美味しかった。日々一合……。田んぼを守るため

に、ごはん一合酒一合。食べるために米を作っている斎藤さんもまた、日本酒が好きだった。



「ほ穂の会」の田植えの風景。



アースデイマーケット出店の様子。



「ほ穂」のラインナップ。

魚屋(さかなや)
茨城県古河市上和田125-1 《電話》0280-76-0129 《FAX》0280-76-9035
<http://www.earthdaymarket.com/296/fish/> (アースデイマーケット出店者情報)

編集後記

読者の皆さま、今年もよろしくお願いたします。

「戦後70年」、明るい未来というよりは、憲法を変え、沖縄・辺野古の海を壊して防衛を強化し、放射能の後始末もできぬまま原発再稼働を始める……と時代を逆戻りするかのようニュースで新年を迎えました。アジアの仲間とともにありたいと願うAPLAは、こうした状況にきちんと目を向けていきたい。そういう思いで、今号は、「今、考えたいこと」を急ぎ掲載しました。どうぞ皆様のご意見もお寄せ下さいね。(大橋)

2014年7月に起きたイスラエルによるガザ攻撃は、コトが一旦落ち着いてしまうと、その後の状況はあまりメディアなどには登場しなくなる。しかし、理不尽な暮らしを強いられている人が今もたくさんいることを忘れてはいけない。民衆交易の商品は、モノでつながっているからこそ、それを手に取るとき、商品の先にいる人やコトに思いを馳せられる。今号の特集はパレスチナ。皆さんがオリーブオイルの先を想像する一助となれば幸いである。(吉澤)

はからずも、コラム「美味しいマンガ」と「わたしの友産友消じまん」で、こだわりの日本酒づくりについての話題が並びました。お酒が飲めないわたしはもっぱら“食べる専門”ですが、食べる(飲む)ということは、生命をいただくということ。その生命が育っている環境もまた、わたしになる。そんなことを思う日々です。(野川)

ハリナ HALINA

2015年2月号 vol.02-no.27
2015年2月1日発行

編集長
大橋成子

編集者
吉澤真満子、野川未央

表紙写真
長倉徳生

デザイン・制作
十年舎

編集・発行
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

印刷
株式会社セイズ

事務局の動き(2014年11月～2015年1月)	
10月 29日～ 11月 13日	グリーンコープ共同体“fromネグロスセミナー”が開催され、大橋、吉澤、野川が各単協を訪問しました。[グリーンコープ生協みやざき、グリーンコープ生協とっとり、グリーンコープ生協おかやま、グリーンコープ生協やまぐち、グリーンコープ生協おおさか、グリーンコープ生協かごしま、グリーンコープ生協おおい、グリーンコープ生協(島根)(日付順)]
10月 29日	バラコンバナナの生産者と一緒に、バナナ募金届け先の福島県内の保育園を訪問しました。
11月 2日	生活クラブ大阪生協まつりに出店しました。
11月 3日	無印良品グランフロント大阪にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 5日	無印良品有楽町店にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 8日	北海道札幌市(ほっかいどうビーストロード)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 10日	北海道標茶町(なかまの家)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 11日	北海道陸別町(陸別くらし塾)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 15日	福島県福島市(スローフード福島、カフェ・ギャラリー風と木)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 16日	二本松有機農業研究会の収穫祭にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 17日	パレスシステム埼玉平和募金団体交流会に参加しました。
11月 18日	パレスシステム東京(あやせ委員会)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 19日～ 30日	フィリピン・ネグロス島、北部ルソンよりゲストが来日し、第4回アジアBMW技術交流会に参加、ならびに現場視察訪問(茨城、山梨、静岡)を実施しました。アジア学院、および福島県南相馬市、同二本松市も訪問しました。
11月 20日～ 22日	第4回アジアBMW技術交流会に、秋山・吉澤・野川・大久保がフィリピンゲストと一緒に参加しました。
11月 23日	東京朝市・アースデイマーケットに、「P to P Café」として初出店しました。
11月 24日	立教大学で開催された「国際家族農業年から始まる小規模家族農業の道—フランス農業開発研究国際協力センター(CIRAD)の研究者を迎えて」に参加しました。
11月 25日	フランスのCIRADの研究者を迎えて開催された参議院・院内集會に参加しました。
11月 26日	東京都港区(エコプラサ)にて、大地を守る会とエコプラサの共催で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 27日	「チョコレート・アライアンス×大地を守る会コラが開催 プレス向け新作発表会」に主催メンバーとして参加しました。
11月 29日	生活クラブ生協神奈川他関連団体開催「東日本大震災・復興支援まつり」に参加しました。
11月 29日～ 30日	バナナ募金を支援している東洋大学BMS(バナナ・メークス・スマイル)の学生メンバーの福島ツアーが開催され、大久保が同行しました。
12月 7日	NINDJA主催「アチェの祈り—“あの日”から10年—」に、飲食・物品販売で出店しました。
12月 8日	パレスシステム埼玉(北部エリア委員会)にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
12月 9日	パレスシステム埼玉・平和フェスタに参加しました。
12月 11日	東京都杉並区(カフェ・アンナブールナ)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
12月 14日	第8回国際有機農業映画祭に出店しました。
12月 14日	東京朝市・アースデイマーケットに、「P to P Café」として出店しました。
1月 13日	時局懇談会を開催し、一般社団法人協同センター・東京の若森資朗さんを講師に迎えました。
1月 17日	チョコレート・アライアンスと大地を守る会共催の「チョコレートナイト」に参加しました。
1月 19日	BMW技術協会若手幹事会・第4回アジアBMW技術交流会実行委員会に吉澤が参加しました。
1月 19日	東京都渋谷区(hako gallery)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
1月 23日	無印良品有楽町店にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
1月 24日	神奈川県逗子市で開催された「国際文化フォーラムin逗子」の企画として「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを実施しました。
1月 25日	東京朝市・アースデイマーケットに、「P to P Café」として出店しました。
1月 29日	パレスシステム東京(調布A委員会)にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
1月 31日	埼玉県飯能市(ヤナギコーヒー)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。

事務局からお知らせ

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- 【共同要請】ガザ紛争における戦争犯罪を裁くために、日本政府のイニシアチブを求めます(外務省へ提出)

「福島の子もたちに届けよう バナナ募金」へご協力を!

20施設、約1400人の子もたちへバナナの発送を継続してきていますが、依然としてバナナを通じて福島との関わりが必要であると感じております。募金額が減少してきております。皆様のご協力、よろしくお願いたします。

From Northern Luzon, Philippines [北部ルソンより]

フィリピンのみかん村より日本にやってきました。

APLAのアジアのパートナー地域のひとつ、フィリピンの先住民が多く暮らす北部ルソンですが、これまでなかなか具体的な活動まで結びつかず、じっくりと関係をつくりながら、「農を軸にした地域づくり」に一緒に取り組みたいと考えてきました。フィリピン社会の中でしばしば差別的な扱いを受けてきた先住民。しかし、その生活は自然と人の調和、先祖から伝わる知恵を大事にしたもので、学ぶべきことが多くあります。

ネグロスや東ティモールとの交流

これまでにネグロスや東ティモールの農民が北部ルソンを訪問し、交流を重ねてきました。2009年の1月には、ネグロス島から農民の代表13人が交流兼スタディツアーに参加。もともと篤農家の多い

北部ルソン、同じフィリピンでも農業に対する考え方が違い、大きなカルチャーショックを受けて帰ってきました。長きに渡って農園労働者であったがゆえに構築された労働者意識が浸透するネグロスとは違い、「8割自給して農民だ、4割を外から買っていたら農民ではない!」と言い切る北部ルソンの農民たち。その後、ネグロスで農民同士の議論を深め、カネシゲファーム・ルーラルキャンパスの設立へと発展していきました。2010年11月には東ティモールのコーヒー生産者も訪問。



サツマの前で、ギルバートさん。

その時に教えてもらった柑橘のワインの作り方が持ち帰られ、そのワイン作りが今ではコーヒー生産者の女性たちの協働の活動へとつながっています。まずはできることから

ネグロスや東ティモールの訪問を受け入れてくれた一人が、ヌエバ・ビスカヤ州マラビン渓谷のギルバート・クミラさんです。ギルバートさんの地域では「サツマ」と呼ばれる温州みかんをはじめ、数種類の柑橘を生産しています。90年代から栽培が盛んになり「サツマ」は品質のよさと酸

味が受け、マニラでも人気に。軌道に乗っていた柑橘栽培ですが、ここ近年、気候変動のせいか、農業や化学肥料を使う慣行栽培の影響か、病虫害が広がりが栽培を継続できない生産者も出てきています。少しでも地域内の循環を取り戻して、豊かな自然を取り戻せないだろうか……。2012年にはギルバートさんの農場にBMWのプラントが設置され、その活用を実践していくことになっていました。より具体的に活用する方法を探るため、2014年11月、ギルバートさんは来日し、BMWを活用しながら有機農業を実践している農家を訪問させてもらいました。訪問先では、どの農家も自前で堆肥を作っていることに注目。フィリピンで有機農業がうたわれるようになったのはつい最近のこと。自分で堆肥を作る農民をほとんど知らない、とギルバートさん。一気に変換するのは難しくてもできることから、まずは自分で堆肥を作ってみると話してくれました。



堆肥作りを日本で視察。

かつて、ネグロスの農民たちにギルバートさんはこう話していました。「たくさんのNGOが来て様々な情報を提供するけれど、それは教科書の中の話。実際に何を選んで自分が取り組むのかを取捨選択するのは自分自身」。さて、ギルバートさん、これからどのように展開していくのか楽しみです。APLAとしても、彼らに寄り添いながら、マラビン渓谷の自然環境が戻るように一緒に取り組みたいと考えています。(APLA事務局長: 吉澤真満子)

〔注〕バクテリア(微生物)、ミネラル(造岩鉱物・ウォーター(水)の略、バクテリアとミネラルの働きをうまく利用し、土と水が生成される生態系のシステムを人工的に再現する技術のこと。